

獨協大学外国語教育研究所・
獨協大学国際化推進委員会共催

第 12 回公開講演会

オンライン国際教育の現在と未来：

COIL 型教育と外国語学習

2022 年 6 月 10 日（金）

池田 佳子 氏

（関西大学国際部教授・グローバル教育イノベーション推進機構副機構長）

獨協大学外国語教育研究所

よろしくお願いいたします。改めまして関西大学の池田と申します。

本日は先ほどご紹介いただきましたこのテーマでお話を進めていきたいと思います。1時間ほどということで皆さんとお話をさせていただいて、質問の時間もあるということですので、ご意見、ご感想もお聞かせいただければと思います。

本日はこういったアウトラインでお話を進めていきたいと思います（注：配布用スライドは付録として本文末に掲載）。スライドは一部日本語が入りますが、英語のものもありますけれども、ビジュアルが多いのでお分かりいただけるのではないかと思います。まずは背景から始めまして、その後に COIL を理解するという基本的な部分をお話しさせていただいた後に、本日は外国語教育に携わっておられる方が多いと思いますので言語学習に焦点を当てて COIL について少し考察をした後に、COIL の事例、関西大学の事例になりますが、少しご紹介いたします。その後に、この点、皆さんご関心があるのではと思いますが、COIL というのは実践として着目を浴びているが実際に効果はあるのかという部分について、本学の事例ですがご紹介するとともに、最後に今日のお題にもありますけれども、オンライン国際教育、この COIL を含めた形の実践というものの未来形を考えるということを、皆さんと考えさせていただくというきっかけづくりという意味で話題提案をさせていただきたいと思っております。

では、まずは COIL の背景というところから進めていきたいと思います。まずはここからだと思いますが、パンデミックですね、世界中のパンデミックの影響がありました。教育がストップしたというのは皆さん覚えておられるかと思います。そして、世界のいろいろな国々がありますけれども、高所得の国では、日本も含まれますが多くの人が僅か数日の準備でオンライン授業に切り替えるということが起こりました。MOOCs の LX、ご存じだと思いますけれども、CEO は世界は3%のオンライン学習だったのに、このコロナ禍のパンデミックを受けて100%のオンライン学習になったみたいなことを表現したりしています。日本は少し後れをとったんですけども、後でお話ししますように、Japan Virtual Campus といったようなものなど、オンライン国際教育の黎明期を迎えていると言っているかと思います。

2022年の現在ですが、世界の多くの地域でシャットダウンというのは完全に開かれ始めて、日本も観光客が入って来られる状態に今日からなったということになります。その中で多くの人が対面式の teaching/learning mode に戻ったということになります。ユネスコの報告によりますと、パンデミックの後に多くの国々が日本を含めて教育と研究活動を継続するためにオンラインとそれからオンサイト、face-to-face の両方のモードを適用したいいわゆるハイブリッド型の教育、学習を行っているという報告があります。

こちらはスライドを見ていただきますと、これは2021年の第2回の IAU という国際ネットワークが行った世界調査報告書なんですけれども、高等教育機関での経験レベル、学習の経験レベルというのは大きく向上していることがここに示されています。特にオンライン学習の利用というのは9割、ほぼ100%ということで、非常に高い比率で活用がなされてきています。それから、学生とのコミュニケーションのためのデジタルコミュニケーションツールの使用ですとか、

Virtual Exchange、それから COIL、今日のテーマですけれども、こういったものは世界的に非常に高いレベルのアプリケーション、応用がなされているという報告があるということが示されています。先進的なテクノロジー、デジタル技術というのは、刻一刻と展開しているんですけれども、このテクノロジーが、より多くの人々が学習者となることができ、そしてまた指導者になることができる、という可能性を非常に秘めているものになっています。このスライドを見ていただきますと、実際の事例をここでご紹介しているんですけれども、特別なニーズを持つ生徒を支援するツールとしてテクノロジーの活用が進んでいるということもあります。

右手のスライドに見えていますのは、関西大学で導入したグローバルスマートクラスルームのアプリケーションで、Class と言います。これ、活用しますと例えば手話や視覚支援サポートを必要とするような学習者にも随時そういった情報を提供しながら授業をするということが簡単にできるようになりました。それから、この Class アプリと AI による自動アバターの手話翻訳アプリとかそういうものがあるんですけれども、こういったものを組み合わせることで、より多くの学習者層にインクルーシブに教育を提供するということもできるようになったりするわけです。それから、左手に見えていますのが、ご覧になった方があるかもしれませんが、テレプレゼンスロボットです。これは今、会議とか教室で広く使われるようになってきていると思うんですけれども、こういったテクノロジーでも物理的にその場にいない人もロボットを通して社会活動に参加するということができるようになったりします。

それから、多くの方々がもう参加されたり活用されているかもしれませんが、このメタバース、これが教育を含む様々な社会活動、いわゆるサードプレイスになりつつあります。スマートフォンを含むあらゆるデバイスを使ってメタバースに参加するということができるようになりましたよね。VR のヘッドセットのようなものも手軽な価格になりつつありますし、そういったところで体験をするというような学習形態も生まれてきていると思います。このメタバースの空間なんですけれども、恐らく現実社会の空間よりもはるかにダイバーシティ、多様性対応、それからセルフアイデンティティへの多様性の対応、広い受入れということに対して、早く対処ができていてということで特徴づけられています。ここにあるような、自分が好きなボディタイプですとか顔の特徴、それから服のスタイル、より適した自分の趣向に合わせたアバターを作成することによってメタバースに参加するということができますので、いわゆるメタバース、バーチャル空間というのは非常に着目度が高いものになります。

それから、皆さんが今日も使っている Zoom ですけれども、こういった Zoom のアプリもこの language barrier、言語の壁をテクノロジーで克服するということを目指して、いろいろな技術革新が進んでいます。例えば、Zoom ですと 2022 年、今年末頃までにということでニュースがありましたが、12 の翻訳言語と 30 の文字起こしの言語を利用できるようにするというようなことも起こります。こういうことが起こると、今までにいろいろ苦難だと思っていたことが実現可能になってくるということになります。パンデミックがデジタル技術の活用によって進化する教育、今までよりも進化してより深化、深まるという漢字も使っていると思いますけれども、そ

ういった教育をもたらしつつあると言えると思います。

パソコン（スライド画像）の中に1つちょっと引用させてもらっているのは経済学者なんですけど、リチャード・ボールドウィンという方がいて、『GLOBOTICS』という本の中で、こんなことを書いています。グローバル化の波は、新しいテクノロジーと世界経済の力が組み合わさって、全く新しいチャンスと課題を生み出すかもしれない、というようなことを言っています。例えば、デジタル技術によって、有能な外国人が在宅勤務で私たちの日本の職場に来て、サービス業や専門職の仕事を獲得するみたいなことまでも技術を使うとバーチャルの中でできたりします。

そして、機械翻訳がどんどん革新されていくことによって言語の壁を越えることが実現可能になってくると、世界中の高学歴、そして高いスキルを持つ人たちが日本で経済活動に参加して貢献することができるようになる、そういう世界も見えてくるわけです。こういった様々な社会の変容が予測されている中で、教育の在り方というのもまたパンデミックによって加速して変化する傾向にあるというふうに言えるのではないのでしょうか。こういった背景の中に進化する教育の流れの1つとして、今日のテーマである COIL、そして Virtual Exchange があると私は位置づけています。

ここからまずは COIL を理解するということから始めて、外国語教育についてその COIL をどう活用していくかということにお話を動かしていきたいと思います。まず、COIL は何ぞやということからなんですが、COIL というのは Collaborative Online International Learning の略でして、これは教育実践の1つとご理解いただきたいと思います。よくアプリケーションだと思われるんですが、ソフトウェアではありません。実践です。この COIL の実践の中では、能動的学習、アクティブラーニングを促すグループ活動をしなければなりません。これが Collaboration という、C で始まるので、このコラボレーションのタスクなんですけれども、これを課していく教育実践であるという点が大きな定義の鍵になります。この実践ですが、協働学習をする相手は海外大学なわけです。多国籍、異文化集団がこの協働学習をするということですから、物理的に一緒にいなくて遠隔でつながるので、必ず ICT、Information and Communication Technology を介するということになります。

関西大学では COIL を国際化戦略の一環として、つながって協働学習をするときに必ず英語を共通言語としてやりますよということをうたっているんですけども、この実践自体は必ずしも英語を使わなければならないということはありません。いろいろな外国語、それから日本語も使用可能なわけです。COIL を実践するときというのは、海外大学と国内大学でやりますので、学年暦の違いなんかもあります。それらを考慮しますと、例えば本学はセメスターなので、1セメスターのうちに海外のクラスと学年暦、オーバーラップがあるところ、例えば4週間から6週間、1セメスターの中の6週間程度を使ってこの協働学習を行うことでいわゆる COIL 科目というのが実現していくわけです。その中で何ができるかというのは、本当に多様なことができて、専門分野に合わせて、例えばリサーチプロジェクト型のような協働学習をさせる、メディア

プロダクトの制作をさせる、ビジネスプランを生み出すような企画型のものもあったりします。それから、社会運動につながるようなアクション型のものなども事例があります。こういった形で専門分野に合わせて多様な協働学習というのを設計することができるので、非常にフレキシブルな教育実践であるというのも理解いただければなというふうに思います。

この COIL ですが、推奨されている学習モデルというのがありまして、長年 COIL を提唱しているニューヨークの州立大学がこのモデルというのを構築して、本学でもそれを導入して活用しているわけなんですけれども、この 3 ステップモデルというのを少しご紹介しておきます。まず、この最初の 3 ステップの 1 つ目で海外のチームのパートナーの学生たちが初めて出会うわけです。そしてそのチームを作るので、互いを知り合うための、アイスブレイカーステージというのがあります。ここでは自己紹介をしたり、自分たちの自己開示を促すような活動をさせるので、この中で例えばビデオストリームとか、SNS、Facebook を使ったりという時代もありましたけれども、こういったメディアを活用して互いの紹介を行って、互いを知り合うという活動を行います。

そこで、人間関係構築が成り立ってきたところで、次のステージ、Comparison & Analysis というタスク、第 2 フェーズに入ります。このフェーズというのは次にお話しするサードレベル、3 つ目のレベルに行くための準備期間というふうに位置づけていいと思いますが、ここでは情報交換を行います。例えば、福祉、厚生 of 仕組みとかテーマを決めて、日本とアメリカといった形で、例えば学生がそれぞれの国の事情を調べてその情報を相手側のパートナーに提供するという交換型です。昔ですとベンバルのような形でですけども、そういったタスクを行うわけです。ここでは互いに情報提供するので、一方向提供を交互に行っているという段階にとどまっています。ただこれを行うことで、例えば海外との時差、それからどんな ICT ツールが一番有効かといったようなところを探り合いながら、自分たちのチームに一番何が機能するかというのを同定する、そういった作業ということでこの活動をしていただいています。

最後のステップになるのが、この Collaboration ステージというもので、この Collaboration、協働学習では国内外双方から参加するメンバーで形成するグループが 1 つのアウトプットを生み出していきます。先ほど申し上げたりサーチプロジェクトとかショートムービーとかそういったメディアプロダクションなどもそれに該当します。共同作業は相互のコンセンサスを得て、1 つの目標に向かって走って遂行するわけですから、その中にコンフリクトも起こりますし、文化的背景の異なるピアが集まっているわけですから、いろいろなことが起こります。それから、外国語で意思疎通をするというところもありますので、英語を学ぶではなくて英語でアクションを行っていくという意味で言うと、非常に学生たちにとってはチャレンジングなタスクになります。一方で、その中で培っていくいろいろな資質というのは、非常に我々が高等教育機関に望むべきものがアウトカムとして生まれてくるということも言えると思います。

この COIL なんですから、家族、系列のような用語というのは世の中にたくさんありますので、お聞きになられた方もたくさんいるのかもしれませんが、ここに少し用語を並べてみました

が、例えば2003年頃には Telecollaboration というふうにヨーロッパで最初に命名されたものもあります。実際に、その次に COIL というのがアメリカで生まれるわけです。これが2006年くらいで、これはニューヨーク州立大学のジョン・ルービンスという方が名前をつけたというところから始まっています。一方、アメリカとヨーロッパでもこの COIL 関係の系列のもの、成長の過程は少し違うんですけども、ヨーロッパでは ERASMUS がありますので、その ERASMUS と絡めて、Virtual Mobility とか、Online intercultural exchange というような表現も出てきています。それから、一部 COIL を含む大きな上層部に、Virtual Exchange というような表現が最近をよく使われるようになってきたんですけども、これもヨーロッパ、それから日本国内でも非常に盛んに活用されるようになってきています。

様々な用語があるんですけども、この講演では3つ皆さんと定義を共有させていただこうと思います。ここにある3つ、丸の部分です。まず、Virtual Mobility というのがあります。この Virtual Mobility は海外大学で提供している授業、これを母国や遠隔にしながら正式に参加して現役学生と共に学ぶという実践になります。オンデマンド型または同期型、いろいろあると思うんですけども、例えば MOOCs のようなイメージですが、LMS のようなプラットフォームに登録して学んでいく、そういったイメージのものになります。科目履修です。

それから、次に Virtual Exchange があります。こちらは地理的に離れた場所にいる学生たちをテクノロジーでつなぐことで可能になります。これは COIL と同じコンセプトです。そのつなぎの後に何をするかということですが、この定義はすごく大きくて、単なる表面的な文化交流で終わらないことということが定義の中に入っています。なので、いわゆるつないで楽しかったね、さようならで終わってしまう、これは Virtual Exchange とは言わないですが、ある一定の学びをそこから生み出していくということが求められているというふうに言われています。非常に大きな定義になっています。

そしてその中の1つとして COIL というのがあります。この COIL についてはもう少し具体的に定義がありまして、カリキュラム、教育設計に基づいて Project Based Learning (PBL) などの協働学習を海外大学の科目と連携して行うということが定義になります。通常、既存のシラバスに COIL の学習実践を組み込んでいくというのが典型的な事例になっていまして、今、本学でも行っている世界展開力の授業などでもこの COIL 型教育というのが推奨されています。

こういったオンライン上の国際教育活動を展開するために、関西大学では、2018年からこれを推進する新たな機構ということで、先ほどご紹介を受けましたが、IIGE という機構をスタートさせています。現在はもう最終年度に入りましたが、世界展開力強化事業の助成を受けてこの事業に採択されている大学を取りまとめるプラットフォーム校として推進する活動を行っております。その1つの活動の中に、日本 COIL 協議会というものを発足させておりまして、これは世界展開力事業採択大学に限ることではなくて、日本の中の大学、高等教育を中心とする機関に参加無料で入っていただいているようなメンバーシップになります。正会員は大学単位ということであとは個人会員という、お一人ずつでも参加することができるというものも持っていま

す。この協議会の中では様々な情報提供をしたり、海外チャプターというのがありますので、海外大学とのマッチングを行ったり、そういったことも行っています。もちろん COIL に関するトレーニングも随時やっていますので、こういった活動機会を得たいと思われる大学、個人会員希望の方はぜひ IIGE と検索していただければと思います。

ここから COIL そのものについてもう少しだけ深掘りして皆さんに共有しておきたいと思います。先ほど 3 ステップのモデルをご紹介しましたが、その COIL の最終ステージというのが C、Collaboration、協働学習だったと思います。ここがすごく鍵なので、この辺を少しお話ししたいんですけども、この COIL のタスク、協働学習のタスクというのがどういうふうに設計されるかで、COIL が成功したかどうかが決まってくるということになります。このタスク次第で能動的な学習活動を駆使して学生たちは学びを深めてくれるかどうかということになります。

このスライドに少し出ていますが、皆さん、もしかしたらラーニング・ピラミッド (Learning Pyramid) というのはご覧になられた方、もしくは活用されておられる方も多いのではないかと思います。こちらは Bayston の Learning Pyramid というものになります。見ていただきますと、学習習得率これが Lecture から Teaching others といういろいろ広がっていますけれども、ディスカッションとか実際にやってみるということで学ぶとか、他者に教えるといったような Active な学びになればなるほど、学習習得、リテンション (retention) が高いパーセンテージを示すというピラミッドになっています。ここで申し上げたいのは、Active な活動をする、これを COIL タスクに盛り込んでいくことで、この COIL の科目実践に高いアウトカムを期待することができるようになるという点をお伝えしておきたいと思います。それから、COIL の特徴として海外大学の科目、国内大学の科目がマッチングするという、このマッチングの中で、同じ科目、例えばアメリカの A という科目と日本の A という科目、全く同じカリキュラムで、全く同じシラバスで動いていることはほとんどありません。そのマッチングをするときに、このマッチングが学際的になるということがほとんどのケースになります。

ここでちょっとどういった学際性のある COIL というのがあり得るのかというのを少しご紹介しておきたいなというふうに思います。こちらは私が、Interdisciplinary Map、学際性マップと呼んでいるものなんですけれども、これを少しご紹介すると、COIL というのは様々なマッチングがあり得るんだなということをちょっとイメージとして感じていただけるのかなというふうに思います。いろいろなこういう科目が成立します。例えば 1 つとしては、Student A in art history、例えば art history の学生、ある大学の学生が海外大学の art history の学生と一緒に、reviewing the literature on Van Gough ということで、Van Gough について一緒に調べる。これは本当に A と A がミラーイメージでマッチングするケースという、非常に稀なケースになります。これもあり得るわけではないですが、1 つの COIL の事例としてはあまりないケースですが挙げておきました。

そして、2 つ目としてはこちらにあるような Student A in University A'、1 つの大学、これが computer science が専攻だったとします。“will work with Student B in University B' in

mass media communication”ということで、mass media communicationを専攻しているクラス、なのでコースごとの科目、シラバスも異なってきますけれども、この2つがマッチングをして、“producing a short digital commercial clip”ということで、それぞれのスキルを生かして、メディア制作をする。こういった形のCOIL科目というのは非常に多く生まれます。

それから、例えば“Student examining a Japanese WWII history”、第二次世界大戦の歴史を勉強している科目の学生と、それからgender studiesを専攻している学生、このクラスがマッチングをしたときに、gender studiesの視点から第二次世界大戦を見るというような相手側の分野の視点を活用して、COILを進めていくというようなcross-disciplinaryというんですけれども、こういったCOILも成立します。

それから、interdisciplinary COILということで、これが一番多いのかなと思うんですが、Student A in business management、例えばこのA大学のbusiness management専攻の学生が、Student B in primary education、初等教育を専攻している学生とマッチングする。そして、その中で、“researching on Edtech product companies in the different parts of the world”ということで、Edtech、デジタルを活用した教育の会社についてこのbusiness managementとそれからprimary educationの学生が調べる。これはAの分野でもなくBの分野でもなくCという異なる分野にAとBと一緒に協力してミッションを遂行するというようなCOILになっています。ご覧いただきますと、非常に分野が多岐にわたって学際的な協働学習のタスクというのを学生たちは取り組むんだということがお分かりかと思います。単に自分たちの分野の科目をお互いに交換して教え合っているというのがCOILではないということがここでお分かりいただけると思います。

1つ事例を関西大学からご紹介しておこうかと思います。これはスイスのチューリッヒ応用科学大学と関西大学のビジネス系の科目で行ったCOILになります。5週間程度の協働学習を行ったものなんですけれども、ここにマイルストーンということでタイムラインが出ていますけれども、チームビルディングから始まって、アイスブレイカーですね。それから3段階のマイルストーンというのがあって、最終プレゼンを協働で行う、そういったものになっています。この中で行った協働タスクというのはDeveloping Marketing Strategyということで、7つの分野を対象にして、その中でポジショニング理論を活用して、その分野のマーケティングを分析してその成果を共有すると、非常に高度な専門分野の協働学習をしたものになります。

ここに見ていただけますように、こんな形でそれぞれ先生のガイドラインに従って学習者の小グループがこのCOILの協働学習に取り組みました。COIL期間中というのは、こういったWeek 1からWeek 5までプランが書かれていますけれども、この学習者たちのチームをうまく誘導していく、ガイダンスしていくというファシリテーターとしての講師の力量が非常に求められるものになります。各週で何を遂行すべきかというのを学生たちに提示して、ただし、全てを、あれをしなさい、これをしなさいとガイダンスするのではなくて、各チーム、それぞれの裁量に任せるんですけれども、きつく締めすぎないけれども、緩すぎないというようなファシリ

テートをしながらうまく目標達成に導く、そういったファシリテーションが必要になってきます。

このクラスの最終プレゼンは、パンデミックの中でしたので、Wonder というツールを使って、各々が好きなテーブルに移動してビデオチャットでポスターセッションのような形で発表をするという、そういったツールなんですけれども、それを使って発表を行っています。学生たちはお互いグループの最終プレゼンを見て、どれがいいプレゼンだったかというベスト賞を選ぶというようなタスクを持って最終プレゼンを行ったというものになります。ここを見てくださいと、それぞれ自宅から参加していますので、全員マスクはつけていませんけれども、こういった形でバーチャルのほうがより顔が見えるような形で親近感を持ってプロジェクトができたと思感を言っていました。

この COIL のことを具体的にいいますと、先ほどの国際的なマッチングという意味ではどんな科目だったのかという話をしますと、チューリッヒのほうが、サービスインダストリーとかファシリテーションとかそういったところのテーマを扱っているような科目でしたので、あえて分析する対象となっていく業種をそこに合わせていくということを工夫されました。例えば、ヘルスケアサービスとか、小売業、ビジネスコンサルティングサービスというようなところを分析対象にすることで、それぞれの科目でやらなければならなかったラーニングタスクというものをうまくこの COIL の中に埋め込んで、このセメスターの中で COIL の実践を実現することができたという、そういった事例になっています。

COIL で、先ほどのように「科目」というているんですけど、1 科目ではなくて、海外大学の科目 A と国内大学の科目 B の間に生まれてくるものになります。その COIL 実践を計画するときには、非常に様々なコーディネーションの設計がまずは必要になってきます。ここのスライドで見ていただいているのが、マッチングをして、その先に設計をするときに使うようなファクトシートなんですけれども、例えばツールをどうするか、同期型、非同期型のツールを使う、何を使うとか、それからどんな言語を共通言語としてこれを進めるか、時差はどれぐらいなのか、いつその活動をさせるのか、それからそれぞれ科目にはシラバスがあるわけですから、学習目標、タスク設計をどういうふうに、どれを持ち寄って、または新しく生み出すのか、そういったコーディネーションが教員の間でまずは遂行されなければならない。これにすぐ皆さん抵抗を感じられることもありますし、ここにやはり手ほどきがあってガイダンスがあるということが非常に大事になってきますので、HIGE ですと、例えばここに対するトレーニングを提供することで、よりご支援をして伴走することを実現させたりというふうに行っているわけです。

そして、今まで COIL の話をしてきましたけれども、コロナ禍以前に COIL を推奨していたときは、ここにありますような COIL Plus という形で、Plus というのは mobility、留学の部分なんですけれども、COIL をすることで例えば留学のきっかけづくりをする、より関心を持たせるというような形で、ブレンデッド型のものを行っていました。パンデミックになって COIL のみになって、これからまた mobility が再開されようというふうなところにあるわけなんですけれど

も、またこのブレンデッド型が再着目されていますので、こちらにまた戻ってくるのではないかなと思います。本学ですとこんな形で、ちょっとプロモーションビデオを流しながらの説明になりますが、学生が留学の前後に COIL 科目を受講して、それから COIL 科目を受講する中で取り組んだ共修学習をさらに進化させるために実際に現地におもむいて留学を体験する。日米なら日米の双方の学生が共修相手と現地で対面して、さらに交流を深める、そういったプログラムを行ってきております。

さらに、留学期間中にすることも多彩になります。例えば、インターンシップを行う、企業訪問を行う、専門のテーマに沿った授業の受講を行うといったような形で、いろいろなことができております。こういう“plus”の活動をすることで、学生が国や言語、それから文化の壁を乗り越えたマインドを醸成する。そして、自分の将来の可能性を国内にとどめるのではなくて、世界を舞台にして考えることができるような次世代に求められる人材を育成する。そういった視点でこの COIL Plus プログラムというのを行っております。

こちらは1つの事例ですが、アメリカのクレムソン大学との COIL をした事例です。今年も実はコロナ禍の収束の光が少し見えたところで、初めて mobility を加えたこういうクラスというのが今走っておりまして、先日、アメリカから学生たちが本学に来てくれました。我々関西大学の学生たちも2年半ぐらいつと見ていなかった留学生がやってきたものですから大興奮していましたが、こういう形でクレムソンと関西大学でまずは科目の中で COIL を行った後に、実際に留学ということで本学に数ヶ月滞在して、その中で様々なフィールドスタディなんかをしたり、プロジェクトワークをしたりということを対面でやって、またそれぞれの国に戻って、そのプロジェクトを継続するというような1年ぐらひかけて行うような、こういう COIL Plus プログラムを行っている最中でもあります。という典型的な COIL、COIL Plus プログラムについて今ご紹介いたしました。

この COIL ですけれども、パンデミックを受けまして、よりニーズが高まってきたこともあって、典型的でないいわゆるプロトタイプの COIL だけではなくて様々な分野、様々なニーズに合わせた COIL 型教育をもっともっと展開していくべきではないかということで、IIGE で発展型 COIL というものを、ここにありますように、1 から 5 を提供しています。その中の1つが実はこの1つ目に出ていると思いますが、関西大学の言語学習に焦点を当てた COIL というのがあります、こちらを今日は少しご紹介しようと思います。

この言語学習に焦点を当てた COIL を我々は Language Learning focused COIL、LLC と呼んでいます。この LLC なんですが、通常の COIL、先ほどご紹介したような COIL と少し取扱いは別にしたほうがいいんじゃないかというのが IIGE における見解になっています。なぜかといいますと、ここに今日聞いていただいている皆さん、賛同していただける方が多いのかなと思いますが、言語学習を主とする上で配慮すべきことというのが少し通常の COIL と違うんじゃないかという意見からきています。

IIGE において現在精査しながら、LLC をやりたい先生方に対してのツールキットみたいなも

のも作成し始めているんですけども、まずはここに暫時的に比較表というのをちょっとご紹介しておきたいなと思います。それぞれいろいろな次元がありますけれども、簡単にどういう違いがあるのかということだけご紹介していきます。まず例えば学習達成目標、これについては例えば異文化間能力の涵養というのはスタンダードなもの、COIL と LLC での共通項ではないかと思います。けれども、言語学習の場合というのはやっぱり言語を練習する、学ぶということでアウトプットの練習の機会を得るということが非常に重要になっていきますので、対象言語、使う機会を増やしていく。これがラーニングアウトカム、目標の中に明示的に組み込まれていくことが非常に大事になって、この点が少し違ってきます。

次に、タスク設計についても1つ言えることがあるのではないかなというふうに考えてまして、このプロジェクトタスクを COIL ではやるというのはお伝えしましたけれども、言語教育で言えば、例えば task-based language learning というメソッドがありますけれども、こういったメソッドロジーの中で推奨されるような相互行為を促進するようなデザインを COIL のタスクとしてすり替えるというようなこともやっていく必要があるかもしれません。

それから媒体言語、こちらについては英語学習が目標になる場合、英語を共通言語とすることもいいと思いますけれども、外国語教育で様々な言語対象が変わってきますので、例えば後で紹介しますが、本学ですと日本語を外国語として学んでいる層が行う COIL では当然ですが、日本語、それから英語は副次的なサポートとして使うといったように、通常の COIL よりも言語の取扱いというのが非常に繊細になるという点も異なりがあります。

それから、共修のモードというふうに書かせていただきましたが、これは同期型であるのか非同期型であるのかといったところになるんですけども、日米などですと特にそうですが、COIL には時差のハードルというのがつきものになります。その対処法として通常の COIL ですと、非同期型でそれぞれの時間帯で閲覧ができるようなリアルタイムではない形の協働学習の仕方というのを研修したりするんですけども、ただこの言語学習という学生達成目標を考えたときに、やはり同期型モードをあえて増やす工夫を何とか見いだすというのは LLC に限っては必要になってきます。どうやったらリアルタイムのコミュニケーションの機会をどう増やせるのかということをもっと考えて工夫を提供していくというのも LLC のデザインとしては必要になってくる。こういったところで言語教育に焦点を当てるという重要性があるということで私たちは通常の COIL と LLC をちょっと分けて取り扱っています。

LLC ですけども、本学ですとアメリカを中心に今、世界展開力をやっているということもありまして、いろいろな大学機関と LLC をしてきております。こちらは今見ていただいたようなクレムソン大学と関西大学の中で行った LLC になります。それから、ほかにもテキサステクニック大学とそれから関西大学でやったものもありますし、少し詳しくここでご紹介しようと思うのは、デ・ポール大学、シカゴにある私立大学なんですけど、ここと本学で行った LLC、これはもうかれこれ3、4年継続して毎年やっているものになるんですけども、向こうの3年生、4年生の日本語学習をしている科目と本学の科目が行っている LLC になります。

ちょっと詳しく説明させていただきます。これがデ・ポール大学と関西大学の2つの科目の違いといいますか、こういう科目がマッチングしましたよというのを示しているスライドになります。向こう側は先ほど申し上げましたように日本語を学習している学習者のクラスになります。そして、本学側、これは私が担当している科目になるんですが、日本語教育で日本語教師になりたいと希望している教師養成の講座でして、共通言語、この LLC では対象を日本語にしています。日本語を用いて学習者と接触しています。日本語でいろいろな形でプロジェクトを行うということが教師養成の講座の日本人学生にとって貴重な機会になる。そういった目的で双方のニーズがマッチしているケースとしての LLC というふうになっています。大体期間としては6週間程度がセメスターとしてはオーバーラップしているので、その期間に COIL を行っています。タスクは様々なですけども、春学期は翻訳プロジェクトということで、日本の文学を英語に翻訳するというプロジェクトと一緒にやります。秋についてはリサーチプロジェクトをそれぞれのグループが行うというような形で、ニーズに合わせてタスクを分けて、どちらについても言語媒体は日本語を用いる。多少英語が入ったりしますが、日本語が主体な言語媒体になっています。

ツールはいわゆる IT ツールで様々なものを使っているんですが、こういった Padlet というツールを使ったり、あとは LMS を使ったりという形でやっています。この協働作業を行う中で、いろいろな学びを学生たちはしてくれています。これは日本人側もそれから日本語を学習しているアメリカ人の学生も同様でして、それについて詳しく考察をしたものが出版されることになりまして、2022 年度内に『Crossing Borders and Overcoming Limitations Digitally』というタイトルで、シカゴの大学の担当の先生とご一緒させていただき、共著いたしましたので、またこれが出てきましたら皆さんに共有させていただきたいなと思っています。

この LLC なんですが、ご関心を持っていただける先生方、もしいらっしゃいましたらぜひ IIGE のほうに連絡をいただければと思います。実はこれは日米に限られますが、ALLEX 財団という日本語教師養成、それから派遣を行っている財団がありまして、そこと IIGE が連携協定を結びまして、そこで様々なアメリカの大学と日本の大学のマッチングを行っております。ご関心のある方はご連絡をいただければと思います。それから、LLC に特化した、先ほどのような違いを配慮した上での言語教育に携わっている先生方のための COIL 研修というのも IIGE では行っておりまして、こういうのはあまりないと思うんですけども、この中でいろいろな、同じような視点を持って視野を持っている方々とネットワーキングすることができたり、マッチングがここから生まれたりということで、実際に COIL も展開していますので、こちらもご関心がある方はご連絡をいただければと思います。

COIL、それから Virtual Exchange、こういったものを行うことの意義というのは今までご紹介した中でも少し出てきたと思いますし、これも国際教育でいうとやっぱりいろいろな学生たちにアクセスを与えるという意味で非常に包括的な機会であるということも間違いありません。今の COIL Plus で mobility の話を少ししましたけれども、やはり留学ベースの国際協力だけを行っている、世界の一部の学生しかアクセス権を得ることができないという状況は、限定的である

ことは否めません。その一方で、Virtual Exchange または COIL というのは様々な社会的、経済的な理由でそういったことは今まで自分自身にはなかった、あり得ないと思っていた学生層にもアクセス可能にするということが実現できています。こういったところで、COIL、Virtual Exchange というのは強くクローズアップされたこともありますし、今後パンデミックを受けて、次に進んでいかなければならない私たちにとっては mobility が戻ったとしてもやはり一定、維持していくべき必要性があるものだというふうに、少なくとも IIGE では考えている次第です。

関西大学の話になって申し訳ないですけども、本学が今日指しているネクストノーマルの国際教育というものがこの COIL の視点と非常にオーバーラップしてきますので、ご紹介させていただきますが、私たちが今、次に目指しているのはこれです。「インクルーシブな国際教育」です。「より環境に優しく、誰も取り残さず多様性を生かす国際化」、これがパンデミックを受けて、私たちが学ぶ、そしてそこから成長すべきだというふうに考えています。これをどこよりも早く着手していきたいという点もありますし、関西大学だけではなくて、皆さんと手を取り合って、横展開でインクルーシブに国際教育というものの土台づくりをしていきたいというふうに考えております。この礎になるものが COIL の取り組みだというふうに私たちは見ています。なぜかといいますと、国内外の学生たちが共に学ぶということを COIL という実践は当たり前にしてくれるという点があります。特にこのデジタルアクセスが非常に波及した中でいうと、もう本当に、今、日本人同士でしゃべっているけれども、つぎの 1 時間はどこそこの国の学生と一緒に学ぶなんていうことが通常で当たり前に生まれてきているわけです。これを従来の、例えば渡航留学中心の国際教育の活動と比較して考えたときに、先ほども申しましたけれども、いろいろな側面で条件がそろった層でないと参加できなかった国際教育、それに比べると肩肘の張らない、エリート層だけのものではない国際協力というのが構築できるようになってくると思います。これを当たりの国際教育、インクルーシブ国際教育ということで、私たちは今考えているところでございます。

次にお話しするのが、パンデミックの中、パンデミック収束を迎えたときに質問でよく受けるものなので、皆様にも共有したいと思って持ってきたものなのですが、オンライン国際教育と留学の話になります。COIL を考えられる大学様はたくさん多くありました。パンデミックの中、特にぐんと数が増えたんですけれども、そこでよく言われるのが、オンライン留学イコール COIL というふうな考え方になります。ここは少し私は意見が異なっておりまして、COIL はオンライン留学ではないというところをまず 1 点お伝えしたいという点と、いろいろな形でパンデミックの中で、国際教育は一体何をするんだろう、何をすることが国際教育なんだろうということ、改めて定義を再考するという機会をいただいたように思っていますので、少しだけ共有させていただきます。

まず、ここにあるように留学イコール国際教育ではないという点は、まず大きく理解が広まってきて、再認識できたのではないかなと思います。国際教育というのは、定義を文科省から引いてきますと、「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えら

れる態度・能力の基礎を育成する」、というふうになっていまして、外国語学習が必ずしも伴っていないという点もありますし、この中で国際教育というのはいろいろなモダリティで実践することができるものだという事ここでも申し添えたいと思います。例えば、海外に派遣してという形で行われる International education、国際教育もちろんあると思いますけれども、それ以外に International education at home という考え方もあって、国内にいながらでも国際教育の機会を提供することができるのだということが今の認識として上がって、COIL という手法を使うということもこの International education at home の一部になってくると思います。

それから、留学を考えたときに、留学の目的というものも再認識されたのではないかというふうに考えられます。留学の目的はいろいろありますよね。例えば、ここにあるような語学留学をするというのも留学ですけれども、インターンシップ、サービslラーニング、プロジェクト・リサーチ、研究のために留学するということもあって、様々な目的があるわけで、国際交流学習をするために留学するということだけではないということも新たに再認識の必要性があるのかなというふうに思います。

国際交流学習は一体どんなモードでできるんだろうということで、改めて位置づけをちょっとマッピングしてみました。そうすると、典型的なものですけれども、海外派遣プログラムを通して行う国際交流学習、もちろんこれもありだと思います。それから、先ほど申し上げましたような ICL、国際交流学習を国内で行うということもできるんだということも認識する。例えばコミュニティに常にあるリソースとか日本に留学してくる外国人留学生との交流というものを通して行うような国際交流学習もありだし、そしてこれが COIL ですけれども、ICL at Distance というふうになっていきますけれども、もともとから遠隔にあるリソースとつないで、国際交流学習を行うということもできる。このようにいろいろなチャンネルで国際交流学習は実現することができるので、留学させれば良いというふうに今まで私たちは考えがちだったんですけれども、改めて再認識して、どの目的で何を使うのかということを考え始めるという必要性が今は出てきているという点があるのではないかというふうに思っています。

次にお話しするのが、COIL をはじめとしたオンライン型の国際教育で、必ずこの次にも質問が出てくるのが「効果」です。COIL というのは効果があるのか、学習効果はどんなふうなものが生まれてくるのかといったところです。これに関して、先ほど申し上げました LLC の事例をもって本学の事例になるんですけれども、少しだけご紹介していきたいと思います。

ここに持ってきていますのは、1つの事例ですので、これだけでは全ての COIL の効果検証にはならないんですけれども、ご参考までにということで、一度アセスメントを行ったケースをここで提示させていただいております。1セメスターで非同期中心ではあるんですけれども、日米で行ったある COIL の科目について、2つのテストツールを使って効果検証を行ったというケースです。1つ目のテストというのが、OPIc というもので、ご存じの方も多いと思いますけれども、Oral Proficiency Interview というものです。これはコンピューターベースのもので、Ava という擬人化したアバターが出てきまして、その Ava と会話をして自分の発話を収録する。そ

の収録されたインプットに対して、AI ベースでいろいろ会話が進んでいくんですけど、その Proficiency level というのが診断されていく、そういったテストになります。これを活用させていただいて、ある一定期間、COIL 科目、6 科目あったのですが、その中で6 週間程度行った COIL で全学生数 68 名が参加したのになります。T1、T2 ということで、COIL の活動をする前、COIL の活動をした後ということで、同じように OPIc のテストを受けてもらいました。T1 と T2 の間には大体 51.8 日間、この中で COIL 実践を行って、これは先ほど申し上げましたけれども、日米なので必ずしも同期型で毎回オンラインをするのではなくて、やり取りが非同期、リアルタイムのない形で行われたりというのたくさん入っている中で、協働学習を行った、そういったものになります。

実際にこの OPIc、どういう結果が出たのか、これは語学力のみのテストになります。口頭能力のものになるんですけども、こういう結果になっています。ちょっと分かりにくいかもしれないですけども、T1 結果評価レベルと T2 結果評価レベルということで、3 つ目のラインに UP (アップ) /DN (ダウン) というふうに出ています。これは ACTFL (アクトフル) のレベルになっているんですけども、例えば IM というのは Intermediate、IMH というのは Intermediate High となります。そういうふうになっているんですけども、NH は Novice High です。T1 でこのレベルだったものがレベルがアップしましたら、UP/DN のところに 1 とつきます。赤で囲ってある部分というのがアップした学生です。はっきりと顕著にレベルがアップした場合という、例えば Intermediate から Intermediate High の、これは Intermediate 1、2、3 とレベルがありますので、3 レベルアップしたというような学生がいたりします。

こんな形で全部の学生の表になっていますけれども、これを取りまとめるとどういう結果になったかというのがこれです。先ほどのトータルの学生数のうち、23 名がアップしました。34%です。42 人の学生が no changes ということで同じレベルで評価されました。3 人だけレベルが下がっちゃったという学生もいたんですけども、考えていただきますと、非同期型で 50 日間程度の中で行った実践で 34%がスコアアップ、中には 3 レベルアップしたという学生が生まれてくることを考えたときに、語学力を短期間にどう上げていくかというのは言語教育に携わっている先生方はよくご存じだと思いますが、なかなか難しいことであります。これだけ口頭能力がぐんと上がる、成果が出てくるというのはまずまずの成果ではないかなというふうに思うので、そういった意味での効果は非常にあるだろうというふうに考えることができと思います。

COIL で伸ばしている能力というのは、語学力にとどまるものではありません。ここに出てくるようないわゆる涵養できる能力をちょっと取りまとめているんですけども、多くがユネスコが言っているような転移可能能力 (Transversal Skills) というふうに言われるものですが、例えば企画構成力、チームワーク、デジタルリテラシー、それから批判的思考・分析力、メディア制作力、こういった経産省でいいますと「人生 100 年時代の社会人基礎能力」でもこういうものが入っていると思いますけれども、こういったものも collaboration の設計がうまく成功すれば、

学生たちは十分培ってくれるものになっていきます。ここにも挙げましたけれども、先ほどの collaboration の中の設計が、こういった様々な学習を組み込むことで初めてしっかりと、先ほど申し上げたような培える能力を醸成することができるというふうになります。

IIGE でこの COIL を推進している理由の 1 つとしてここにあるんですけれども、COIL 教育を通して、“Creating global classrooms for future-ready graduates” ということで、将来に備えのある人材を global classrooms の構築によって輩出すること。これを目的として IIGE というのは COIL を推奨しています。これはどういうことかと言うと、今、流動性がさらに高まってきている、そして、近未来において活躍することができるための資質ということで、この Employability を向上させていくということを目標に COIL という実践を活用しているという点があります。Employability と申し上げたんですけれども、グローバルマーケットを舞台に戦わなければならない日本の産業界があります。そこに我々が配置していく学生たちは飛び込んでいくわけです。それから、Society 5.0 に私たち突入していくんですけれども、そこでもいろいろな意味でソフトスキルといわれますが、ここにあるような異文化対応能力、こういったものが今までよりもさらにパンデミックを受けて、どんな分野、業種であろうとも必要となってきたのではないのでしょうか。

この COIL の効果検証としても、こういった実践がどのようにそういったコンピテンシーを育成することができるのかというのはしっかり可視化させていくということはとても重要なミッションだと考えていまして、その中で先ほど申し上げた 2 つ目のテストなんですけれども、BEVI という心理統計テストを使っています。BEVI は、ここで言うちょっと時間がありますので、簡単に取りまとめますと、心理統計ツールになるんですけれども、自己の発達に関わる心理学の理論に基づいているアンケート形式の測定ツールになります。これで例えば COIL の効果検証をした場合、例えば Sociocultural Openness という項目を見ますと、Sociocultural Openness はこの COIL を受講した学生ですと T1、T2 で比較すると伸びています。“Plus” をする学生も伸びている。こちらにある一番左側、SA Prep とありますが、これは留学をする前に、国際理解を求める、考えるというようなレディネスのセミナーなんかを行っているんですけれども、その場合ですと講義だけでは、Sociocultural Openness が下がったと。COIL 実践で体験してもらおうほうがより Sociocultural Openness という要素が高まったという事例の結果を 1 つご紹介します。

それから、これはまだ検証段階ではありますけれども、ベネッセの GPS-Academic というテストも活用しています。こちらは客観評価、主観評価、学生意識アンケートといろいろな要素で直接評価方法と間接評価方法の両方を使いながらここにあるような様々な資質について、考察して結果が出てくるというようなものになっていまして、これは先学期、T1、T2 で先ほどと同じように分析をしたものですが、1 つここに結果が出ていますのでお見せしています。プレとポストということで見ていただきますと、例えば姿勢・態度スコアというもので、リーダーシップに関する伸びが非常に顕著に表れたという結果が出てきています。スコアでいいますと、例えば一

部上場企業内定者数の平均に追いつけ追い越せというようなスコアに伸びがあったというところ、非常にいい結果が生まれたというところが1つ増えているのと、あとはもう一つは経験に対する設問というのがありまして、ここにもありますけれども、問題解決に対峙したときの自分の経験という設問がありまして、T1、T2で比較すると、達成率が70%以上の層が増加しているということがここで分かるというふうなものでして、先ほどの語学力だけではなくて社会人基礎能力の部分に対しても COIL というものは効果があるんだよということを可視化することができるということになっています。

ちょっと時間ありませんので、スライド1枚スキップさせていただいて、最後になりますけれども、ポストコロナ禍を見据えてというところで、今後どういったことが起こるんだろう、この COIL というのはどういうふうに活用されていくんだろうというところの見解を少し共有させていただきます。COIL の実践の使い方によってはこの留学の中の幾つかのアウトカムを達成するためのソリューションとしては展開が可能だというふうには思います。この Study Abroad の代わりになるのかならないのかというところというのは、コロナ禍の時期には非常に注目された観点でもありました。ですが、やはりこの留学とオンライン国際教育というのはやはり互いに補完すべき関係であって、優劣はない、別物であるという前提がやはり理解の大前提であるというふうに私はお伝えしたいなと思います。COIL そのものの実践の持つ趣旨、定義、これらをしっかりと押さえた形でどう活用するかという点を考察していくということが大事なのではないかなと思います。

今、活動している1つ、新しい COIL の風景の様子を見ていただいて、そこで最後にしたいと思います。これは21世紀スキルを学ぶというクラスで、これは Virtual Exchange になりますけれども、11か国が参加してくれているコラボレーション、協働学習の授業風景です。これを見ていただきまして、より COIL に関心、親近感をもていただければなというふうに思います。ちょっとこれを流します。2分ほどのものです。これが実際に展開している COIL の事業の様子です。(動画) これが最後の協働学習のアウトプット、発表会になります。(動画)

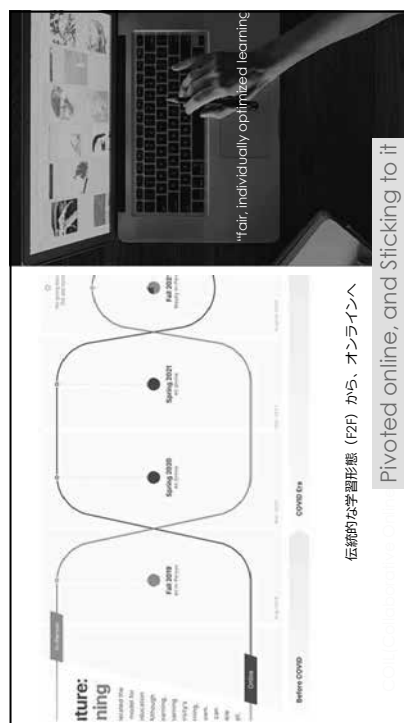
ということで以上になりますが、こういった形で、COIL 実践というものを本学で行っておりますし、本学だけでできるということではなくて、いろいろな大学様で実践を実装していただいて、より多くの学生にこういった国際教育の経験を持っていただきたいと思っているということで、この講演を締め括りたいと思います。以上になります。ご静聴ありがとうございました。



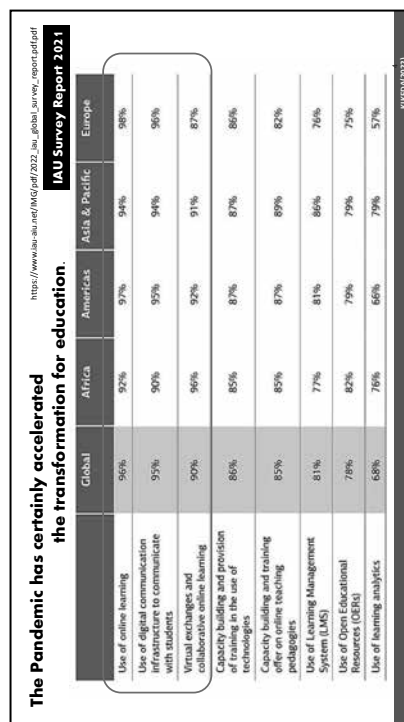
1



2



3



4

Digital Disruption in Education Accelerated by the Pandemic
 ハンデミックがデジタル技術の活用によって進化する教育をもたらした

The next wave of globalization might prove different, as emerging technologies combine with global economic forces to create a whole new set of opportunities and challenges.

次のグローバル化の波は、新しいテクノロジーと世界経済の力が組み合わさり、まったく新しいチャンスと課題を生み出すかもしれない

GLOBALTICS
 国際教育の未来
 2020年11月

Richard Baldwin
<https://www.richardbaldwin.com/newsletter/subscribe>

5

COIL Model

Introduction Videos via Facebook

ICE BREAKER
 Personal Engagement | Team-Building

COMPARISON & ANALYSIS
 Learning communication tools and styles Discovering the ways to work with each other

COLLABORATION
 Project-based collaborative learning

<https://www.facebook.com/groups/COILmodel/>

7

COIL (Collaborative Online International Learning)
Virtual Exchange
 オンライン国際教育型言語国際学習

COIL main task designs :

- Research
- Media Product
- Business Plans, Pitch
- Action plans, proposition to start social actions

6

E-tandem • Telecollaboration • COIL

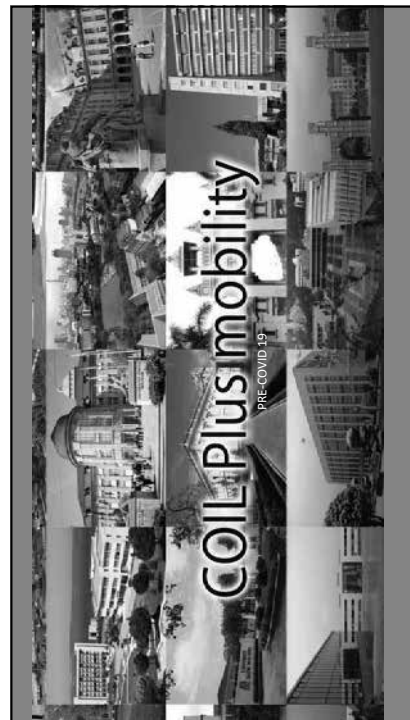
COIL-like terms

- 2003 • Telecollaboration (Ikeiz)
- 2006 • collaborative online international learning (Huisin & Wilson)
 • virtual mobility (VM-BAG)
- 2007 • online intercultural exchange (O'Donnell)
- 2008 • globally networked learning (Starke-Meyering & Wilson)
- 2015 • exchange 2.0 (Soliya, Earn, Global Nomads)

8



9



11



10



12

LANGUAGE LEARNING FOCUSED COIL		
	General COIL Design	ILLC Design
(Student) Learning Outcomes 学習達成目標	Generated based on the matched courses each time - Cultivate intercultural competence	Students have good amount of communication practices using the target language to be acquired - Cultivate intercultural competence
COIL Task Design タスク設計	A task that engages students in collaborative learning, project or team-based task design is expected	A task that enhances students' fluency in L2 communication, involving both sides of students together (ref. task-based language learning)
Language(s) (言語/外国語)	Most frequently English is chosen	Instruction language: English Practiced language(s): various
Collaboration mode 形態のモード	Synchronous and/or asynchronous	Both but synchronous is preferred (as group communication mode)


13

確実に関大のネクストノーマルとなるのは「インクルーシブな国際教育」
より環境に優しく、だれも取り残さず、多様性を生かす国際化



15

NEW ACTION | ALEX財団との連携を12月に締結



IIG is pleased to announce our partnership agreement with the ALEX Foundation, signed on December 14th.

2020.12.22 News News
IIG & ALEX Foundation MOA Signing

14

「留学」≠国際教育

国際教育とは、「国際社会において、地球視野に立つて、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成する」ための教育
→外国語学習がかならずしも伴わない
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/haukoku/attach/1400594.htm

International Education

International Education Abroad

International Education at Home

16

語学留学
専門留学
インターンシップ
サービスマーケティング
プロジェクト・リサーチ

「留学」×国際交流学習

「留学」の目的は、国際交流学習だけだろうか？

Myth:
COILAVE as Study Abroad-Like

International Collaborative Learning

ICL Abroad 海外派遣プログラムを通して 行う	ICL at Home コミュニティにすでにある リソースや、日本に留学し てくる外国人留学生層との 交流を通して行う	ICL at Distance もともと遠隔にあるリ ソースを用いて行う COIL/Virtual Exchange (VE) 等
--	--	--

17

Assessment tools for COIL at Kansai University

1 semester (6 weeks COIL)


- ◆ OPic (Oral Proficiency Interviews-computer)
- ◆ BEVI-J (Beliefs, Events, Values Inventor-Japan)

18

OPic

Ava – the OPic “Tester”

Ava is an avatar figure that personifies the OPic tester. Test takers listen to her questions and respond to her. Having the picture of Ava on the screen helps to engage the test takers in conversation and mimics a one-on-one conversation with a native speaker of the target language.



Oral Proficiency Interview - computer (OPic)

You will be linked on line with your conversator.

Meet Ava! She will be your conversator!
(and one good friend) during your test.

NTT EL
NATIONAL INSTITUTE FOR
LANGUAGE TESTS

19

COIL型教育で涵養できる能力・特性
多くがTransversal Skills / Transversal Competencies で重複されているもの

Intercultural Competence	Cultural Awareness
Planning/企画構能力	Analysis (critical thinking) 批判的思考・分析力
Teamwork/チームワーク	Media Production メディア制作力
Digital Literacy デジタルリテラシー	

THE KANSAI UNIVERSITY

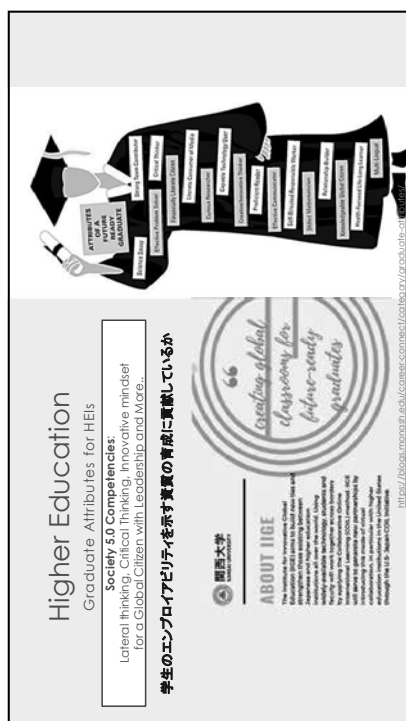
20



22



24

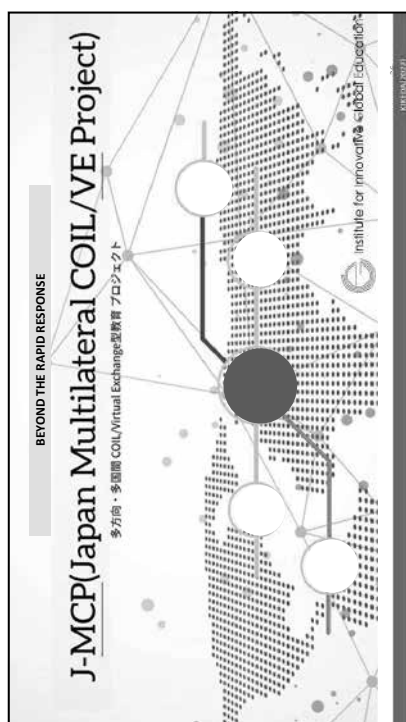


21

[illegible]

(株)ピネッセイキャリア

23



26



28



25



27